
ひらり、蝶のような

五十鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひらり、蝶のような

【Nコード】

N3286X

【作者名】

五十鈴

【あらすじ】

ぱくぱく、目の前の男の人は金魚みたいに口を動かしてる。……あれ？ 言葉が通じない？ 私、しゃべれない！ ここがどこかわからないし、記憶すらない！？ そんないきなりの展開に頭がついていけないながらも、金魚みたいな男の人 エリオに拾ってもらった主人公が自分の過去を探りつつ、「なんとかなるさ」精神でのんびり過ごすお話。でも、なんだかみんな……チートすぎませんか？

1・赤ちゃんに逆戻りですか？（前書き）

軽いノリの異世界ものです。色々と初挑戦してみました。
一人称視点は慣れてないので、読みにくかったらすみません。

1・赤ちゃんに逆戻りですか？

ぱくぱく、ぱくぱく。

目の前の男の人が口を動かしてる。

金魚みたいだなあ、って私はぼんやり思った。

ふわふわした赤みの強い茶髪のせいもあるかもしれない。こついう色の金魚っているよね。

ぱくぱく、ぱくぱくぱく。

かつこいい男の人は困ったように首をかしげる。私もつられて首をかしげる。

するとその人は口を動かすのをやめて、ため息をついた。

あれ？　ため息の原因って私？　よくわかんないけど困らせてる？　でも、美形は特だなあ。困り顔も絵になってる。

ぱく、ぱくぱく。

さつきよりもゆっくり動く口。今度は手振りも混じった。

指で自分の口を指し示したあと、手を口のようにぱくぱくさせる。こてんと首をかしげて、動きを止める。

何を話してるか、わかる？

たぶん、そう言いたいのかなあ。

間違ってるかもしれないけど、私は首を横に振った。

わかりません、と答えの代わりに。

ちゃんと伝わったのか、男の人が頷いた。

わあ、これが世に言う異文化コミュニケーション！

なんだか楽しくなってきた。

そうだよね、どんなに大変なときでも遊び心は忘れちゃいけないよね。

たとい自分のことすら何もわからなくても。

……………え？

ちよ、ちよっと待った。

何がわからないって？ 自分のことって？

私、私は……あれ？

サーツと血の気が引いてく。

金魚みたいに口を動かす男の人がおもしろくて、のほほんとしてたけど。

こんな森の中に座りこんでる理由も、それどころか自分のことすら、何にもわからない！

パンツ。破裂音に驚いて、そっちを向くと、男の人が手を叩いたようだった。

私が急にパニック起こしたから、注意を引こうとしたのかな。

男の人が、落ち着いて、とでも言うように両手を動かす。

それから、にっこりと明るい笑みを浮かべた。

ふ、と全身の力が抜けていくのを感じる。

緊張とか、警戒心とか、驚きとか、困惑とか、不安とか。
全部、どっか飛んでっちゃったように私は一気に落ち着いた。

すごいなあ、この人。

人懐っこい笑顔。男性に使っていい表現じゃないんだろうけど、
かわいいって思っちゃった。

私の混乱が収まったのがわかったのか、男の人はまたぱくぱくと
口を動かす。

さっきはぼんやりしてたから気にしてなかったけど、これは金魚
の真似なんかじゃない。

男の人の口が動いたたびに、音が発せられてる。

つまりは何かしゃべってるってこと。そして私にはその言葉が理
解できないってこと。

口の動きからして、たぶん男の人は、いくつもの国の言葉を試し
てる。

でも、私はまったく聞き取れないでいる。意味どころか、言葉と
して頭が認識してくれない。

男の人が一生懸命なのがわかるから、今度は申し訳なさに落ち込
みそうになる。

大丈夫。そう言うように、男の人は笑顔を見せた。

……エスパー？ さっきからタイミング良すぎじゃないですか。
うっかり安心させられちゃったりして、色々と複雑です。

男の人の手が動く。

片手で私の口元を指して、もう片方で口から何かを出すようなジ
エスチャー！。

しゃべってみてくれる？

あ、そつか。私が話せば、通じる言葉がわかるんだ。
もちろんその言葉を男の人が知らない可能性もあるけど、通じれば万々歳。

試してみる価値はあるよね。

……って、思ったんだけど。

私は口を開けたまま、固まった。

……話せない。

何も、言葉が思い浮かばない。

ずっと頭の中でこうやって考えていて、その思考はちゃんと言葉
になってるのに。

話し方が、わからない。

えっと……赤ちゃんに逆戻りですか？

1 赤ちゃんに逆戻りですか？（後書き）

狙ったわけじゃないんですが、サブタイトルだけ見ると転生ものっぽかったですね。期待はずれだったらすみません。

2・痛いのは嫌なんです（前書き）

ジャンルをファンタジーに修正しました。

うっかり恋愛にしちゃってたんですが、ちゃんとした恋愛要素は当分先だと思います。

2・痛いのは嫌なんです

私はだらだらと冷や汗をかく。

自分のことも何もわからないから、どうやって育ったのかもわからないんだけど。

まさか言葉が話せないとは思わなかった。

言葉を習ってないのか、話せない環境にいたのか。

でも、文字と違って話し方は自然に覚えるものだし、話せない環境なんて簡単には思いつかない。

試しに喉を震わせてみる。

んあー。かすれててかわいくない声が出た。

うん、声が出ないから話し方がわからないっていう仮説も却下。

頭の中では言葉で考え事をしてる。

どこの国のものはわからないけど、言葉は知っているはず。でも、話すことはできない。

単語も文法も出てこないから、言葉を組み立てられない。

……どうして？

だんだん、怖くなってきた。

自分が自分じゃなくて、まったくの他人になってしまったような。今までどこにいて、何をしていて、何が好きで何が嫌いで、何に笑って何に泣いていたのか。

積み重ねてきたはずのものが、全部、わからない。

ぼん、と頭に軽い衝撃。

驚いて顔を上げれば、男の人の微笑み。

さつきとおんなじ、安心させるようなあたたかい表情。

ほっとした瞬間にじんできた視界に、私はあわてて目元をぬぐう。
今は泣いてる暇なんてないんだ。

まずしなきゃいけないのは状況把握。

そのためには唯一の情報源と思われる目の前の人と、意思の疎通を図らないといけない。

身振り手振りでしか表現できないけど、それだけでも伝えられることはあるはず。

ぎゅーっと目をつぶって、パチツと開く。よし、気持ちの切りかえ完了！

私は口を指さしながら、言葉にならない声を出す。

それから首を横に振って、口の前で人差し指を交差させる。

言葉が話せません。

伝わるかな。伝わってほしいな。

私はすぎるような思いで男の人を見上げた。

男の人は考えこむように腕を組んでる。私のジェスチャーの意味を押し量ってるんだろう。

数秒が、数時間に感じられた。

腕組みをといた男の人は、困ったように笑う。

自分の頭を人差しでつついたかと思えば、その指が弧を描きながら私に向く。

そのまま額を軽くつつかれて、私は目を瞬かせた。

何か意味のあるジェスチャーなんだろうけど、見当もつかない。

きょとんとして男の人を見てみると、ジャスチャーはまだ続きがあつたらしい。

顔の前で両手をあわせて、頭を軽く下げる。

ごめんね。

これはわかりやすかった。

ああ、私、放り出されちゃうのかなあ。

しょうがないのかな。厄介事なのは確実だし。

私は男の人に微笑んだ。

いいよ、私のこと放つてどっか行っちゃっても。

男の人の様子からして、元々の知り合いつてわけじゃないみたいだ。

普通に考えて、言葉の通じない赤の他人になんて関わりたくないよね。

しかも男の人は知らないけど、私、記憶も何にもないんだもん。根気強く接してくれてたし、お人好しなんだと思う。

今持つてる記憶の一番最初が、この人の笑顔でよかった。

きつと、これ以上は巻き込んだんじゃいけない。

身体は動くし、一人でもなんとかなるよ。

あきらめたような私の表情をどう思ったのか、男の人が手を伸ばしてくる。

その手が私の肩に乗り、引き寄せられ……って、え？

なんで私、抱きしめられてるんでしょうか。

別れの抱擁とか、そういうやつ？

もしかして、逆に罪悪感を刺激しちゃったのかな。

意図してたわけじゃないけど、そうだとしたら申し訳ない。

気にしないで、と言いたくても話すことはできない。

言葉が通じないってすごーく面倒だ。

どうしたらいいんだろう……。

私が動けないでいると、男の人は耳元で何やら唱えはじめた。

うん、唱える。話すじゃなくて唱えるって感じ。

抑揚の少ない声。なのに歌ってるようにも聞こえる。

不思議と耳に心地いいその声に、ついついぼんやり聞き惚れてしまふ。

声が一度途切れたところで、金色の光が男の人を包みこんだ。

うわ、何これすごい！　きれい！

目の前の男の人の髪が、光をまとうて、赤く明く、輝く。

夕焼けみたいな色だなあ……。

私が呆けてるうちに、声はやんでいた。

金色の光もだんだん薄れていって、名残が髪を不思議な色に染めあげる。

じくじく。

ずきずきずき。

きれいな光景の余韻にひたってた私を現実に戻したのは、断

続的な頭痛だった。

頭が割れそう、とまでは言わないけど、けっこう痛い。

これってもしかしくなくても、あの呪文と光が原因だね。

途中で魔法だと気づいて、何が起るのかなってちよつとわくわくしてたのに。

……文字通り頭痛の種を作らなくたっていいじゃないかつ！

いつのまにか身体を離してた男の人をにらみつける。

涙目になってるから、全然怖くないだろうけど。

いいんです、意思表示なのです。

男の人は苦笑して、私の頭をぼんぼんとなでる。

子ども扱いですか！ 誰だって痛いのは嫌なもんなんですよ！

「オレの言葉、わかる？」

それくらいわかりますよ！ 子どもじゃないですからね！

って……あれ？

今、男の人はなんて言った？

3・言葉って大切なんですね

「特に抵抗もなかったし、失敗してないと思うんだけど……」

男の人の口が動いて、言葉が紡がれる。

ちゃんと言葉として聞こえる。意味が取れる。

え、え？

さっきまで全然わからなかったのに、どうして？

私は驚きすぎて、何の反応もできなかった。

こういうときにオーバリアクションできる人って、実は頭の回転が速いんじゃないかな。

そんなどうでもいいことを考えちゃうあたり、かなり混乱してるみたいだ。

「おーい。何しゃべってるか、わからない？」

男の人は最初のジェスチャーと同じように、口を指し示して首をかしげる。

と、とにかくわかるって伝えないとだよね！

わかるよ、と力いっぱい私は頷く。

でも、あれ？ わからないかって聞かれたんだから、首を振るべきだった？

否定疑問文って地味に答え方に迷うよね……。

「わかるみたいだね、よかった」

ちゃんと伝わったみたいで、男の人は朗らかに笑った。
私も自然と笑みが浮かんでくる。

……うん、言葉って大切だ。

何を言ってるのか理解できるだけで、安心感が違う。

言葉の意味がわかると、話し方がとても優しく、私を気遣ってくれてることまでわかる。

思った通り、優しい人なんだなあ。

表情と身振り手振りだけでもいい人っぷりが伝わってきたくらいだもんね。

「オレの知識を移す魔法を使ったんだ。

今オレが話してるのは、多くの国で使われてる公用語。

たぶん、日常会話くらいは聞き取れるはずだよ」

知識を移せるなんて、便利な魔法だなあ。原理が気になる。

というかこの人って何か国語しゃべれるんだろう？　こっつてそれが普通なの？

記憶がないからここでの普通もわからないし、そもそも今いる場所も国もわからない。

「君が言葉を話せるなら、副作用のない翻訳の魔法にしたんだけど。ごめんね。頭痛、するでしょ。大丈夫？」

本当に心配そうに顔を覗きこまれて、反射的に頷いてしまった。ずきずきと続く痛みに、考え事もうまくいかない。なんだか熱っぽい気もするし、身体も重たい。

っていうあんまり大丈夫じゃない体調だけど、それより言葉がわからないほうが大変だもん。

男の人は助けてくれただけ。こっちが感謝するべきで、謝られる

のは間違ってる。

そうだ、お礼！

私は考えなしに口を開く。

あーうー、赤ちゃんがぐずってるみたいな声。……しゃべれないぞ？

魔法のおかげで言葉はわかるのに、口から出てくるのは意味を持たない声だけ。

『日常会話くらいは聞き取れるはずだよ』

男の人の説明の中で、特に気に止めてなかった部分を思い出す。話せる、ではなく、聞き取れる。

もしかして、今の魔法ってリーディング限定？

問いかけるように見上げると、男の人は私の疑問をすぐに察してくれた。

「副作用は効果に比例するからね。痛いのは嫌でしょ？

まずは一方的でも言葉が通じないと困ると思って、聞き取れるようにだけしたんだ」

もちろん嫌ですとも！

私はこくこくと何度も頷いた。

これより痛かったら泣く。絶対泣く。むしろあまりの痛みに気絶しちゃってたかも。

そしたらもつと迷惑かけちゃってたから、ちょうど好い加減、なのかな。

そこまで考えて、私はやっと合点が行く。

ついたりつつかれたり、謝ったりのジェスチャー。

あれは『オレの知識を君に移すことで、頭が痛くなるだろうけど、

ごめん』っていう意味だったんだ。

そんなん誰がわかるかーっ！

心の中で盛大につっこむ。

まあ、男の人だってまさかあれで伝わるとは思ってなかっただろう。

なんの断りもなくいきなり魔法を使うよりはマシ、くらいに。それを勘違いして、被害妄想にひたつてたなんて恥ずかしすぎる。どうか気づかれてませんように……！

「だいぶ落ち着いたみたいだね。質問してもいい？

はいかいいえで答えられるものだけにするし、わからないのはパスしていいから」

ぐるぐると考え事をしてた私は、その問いかけに我に返る。

表面上は落ち着いたように見えるらしい。

たしかに魔法への驚きや頭痛に関しては落ち着いた……というより、すっかり頭から抜けてたけども。

はいかいいえ。つまり頷くか首を振るかで答えればいいんだよね。それくらいならたぶん大丈夫だと思う。

いいよ、と私は頷く。

ありがとう、と笑顔で言ってから、男の人は姿勢を正した。

自然と私も正座をして背筋を伸ばす。足がしびれる前に質問が終わればいいな。

「ここがどこだか知ってる？」

いいえ、まったく。

まず記憶がないから地理もわかりません。

「自分がどうしてここにいるのか、わかる？」

これも、いいえ。

気がついたらここに座りこんで、あなたが目の前にいました。

「言葉が話せないのは、自分で、もしくは誰かの手で封じてるから？」

これは答えがわからない。

私は首をかしげる。つられるように男の人も首をかしげた。

あ、さっきと逆だ！ 意味もなくうれしくなってくる。

「わからない、か」

男の人は難しい顔をしてつぶやく。

真剣に何か考えてる様子に、少し不安になってきた。

私、どう見ても不審人物だよね……。

ここがどこだかも、どうやって来たのかもわからないなんて、変だ。

悪いことしようとしてたのをとぼけてるんだと思われてもしようがない気がする。

捕まったりとかしちゃうのかな。拷問受けて、やってもないこと告白させられたり。

いけないいけない思考が飛躍しすぎた。

私は正直に答えただけ。あとはなるようになれ、だ。

幸いなことに男の人はいい人だから、なんとかなるさって樂觀視

できた。

「……もしかして、記憶がない？」

ご明察！ 私は力強く頷いた。
すごいなあこの人。普通、たった3つの質問でわかるようなこと
じゃないよね。

私の仕草とか、表情とかも判断材料なんだろうけど。気配り上手
なだけじゃなくて頭もいいんだ。

それとも頭がいいから気配りも上手なのかな。
どっちでもすごいことには変わらない。

「記憶喪失かあ……どの程度なんだろう。自分の名前は覚えてる？」

いいえ。私が首を振ると、男の人は肩を落とした。

えーっと、なんかごめんなさい。

記憶喪失の程度として一番最悪のパターンですよ。

「あ、気にしないで。君のせいじゃないよ」

私がしょんぼりしたのに気づいたのか、男の人はあわててフォロ
ーを入れる。

優しいっていうか、気がまわりすぎるっていうか。

本当にいい人すぎる。

私だったらこんな厄介事、放置しちゃいそうな気がするのに。

非情だなんて言わないでください。君子危うきに近寄らず、平穩
無事が一番です！

「そうだ、まだ名乗ってなかったよね。」

オレはエリオ。よろしく」

さらりと告げられて、私は思わずきょとんとしてしまう。
話せない私は、名前だって呼べない。

男の人は エリオさんは、名前を覚えてくれた。

赤の他人が、知り合いに昇格した瞬間。

喜びよりももっと強い、感動を覚えちゃったりして。
なんだか無性に泣きたくなった。

やっぱり、言葉って大切なんですね……！

3 ・言葉って大切なんですね（後書き）

やっと名前を出せました。

発音は日本男性名の「男」みたいに上がるんじゃなく、下がる感じで。

4・天然キザは絶滅危惧種です

エリオさん、エリオさん、エリオさん。

私は心の中で何度もつぶやく。

記憶力は悪くないと思うんだけど、今まさに記憶喪失なんかになっちゃってるから自信がない。

エリオさんがガリレオさんだとかアントニオさんだとかになったりしたら困る。

しっかり覚えられるように、復唱は基本です！

「どうかした？」

うれしくってにこにこ笑ってる私に、エリオさんは不思議そうに聞いてきた。

それからすぐに、失敗した、とばかりに顔をしかめる。

「って、ごめん、答えられないよね」

気にしてないよ、と言う代わりに笑顔で首を振る。

話せないのはエリオさんのせいじゃないし、聞き取れるだけですごく助かってる。

エリオさんって気がまわりすぎて損するタイプなのかも。

喜びとか、感謝とか。言葉で伝えられないのはちょっともどかしい。

……あ、でも、そうだ。

声は出るんだから、名前だけなら呼べたりしないかな。

知識を移す魔法？ の原理はよくわからない。

今は、聞いた言葉の意味は取れるのに、自分だと文を組み立てられなくて、発音もできない感じ。

名前なら固有名詞だから、国だとか公用語だとか関係ない。

発音さえ真似できれば大丈夫なはず。

せっかく教えてもらえた名前を、ちゃんと呼びたかった。

「えーお、あー」

試しに小さく口を動かして練習してみる。

エリオさん、って呼んだつもり。

赤ちゃん言葉みたいですっごい恥ずかしい！！

「ん？ 何か言った？」

わわっ、気づかれた！

当たり前だ、目の前にいるんだもん。小さな声でも聞こえちゃうよね。

「え、いお、あん」

開き直って、もう一回挑戦してみる。

さっきよりはほんのちょっとマシになったけど……舌の動かし方が違うのかな。

口の構造が違うなんてことはないと思いたい。

エリオさんは目をぱちくりとさせて、いきなりぶつと噴き出した。うわーん！ やっぱり赤ちゃんみたいでおかしかったんだ！

絶対真っ赤になって泣きそうになってる顔を隠すために、私はう

つむく。

どこかに穴掘って埋まりたいくらい恥ずかしい。
ひどい。そんなに笑わなくなっていていいじゃないですか。空気読ん
で華麗にスルーしてくださいよ。

「ごめんごめん、うれしくって」

ぼむぼむ。頭をなでられる。

へ？ うれしい？

顔をあげると、今までで一番きれいな、まぶしいくらいの笑顔。
そのまぶしさは魔法使ったときの金色の光にも負けてない。

私はついついぼへーっと見とれてしまう。

きれいなものは誰だって好きなものなんです。

「口、見てて」

エリオさんは自分の口元を指さして、そう言う。

私は内心首をかしげながら、じーっと形のいい唇を眺める。

……別に下心を持つてゐるわけじゃないのに、何やら照れてくるの
ですが。

「エリオ。エ、リ、オ。

わかる？」

はつきり、ゆっくり、音を区切って声に出す。

名前を呼ぼうとしたのはちゃんと伝わってたんだ。よかったー。
発音を教えてくれるつもりらしい。とことんいい人っぷりを発揮
してる。

笑っちゃった罪滅ぼしみたいなものだったりもするのかな。

「え、い、お、あ、ん」

うーん。けっこう難しい。

音を出す前の口の動かし方にコツがあるのかな。

「惜しい。エ、リ、オ、さん」

「え、るい、お、すあ、ん」

敬称もつけたいってわかったらしい。

名前を呼ぼうとしたのは私のわがままみたいなものののに。

単なる思いつきで、またエリオさんの負担を増やしちゃった気がする。

でも、途中であきらめたらもつと失礼だね。

「もうちょっと早く言ってみて」

「えりお、さん」

今度こそ、と意気込んで声を出した。

まだたどたどしいけど、名前として聞き取れた気がする。

やったー！ 私は思わずガッツポーズ。

「はい、如何なさいましたかお嬢さん」

ぶわあって、一面に花の開く幻覚が見えた。

……この人、天然キザだっ！！

4 ・天然キザは絶滅危惧種です（後書き）

ちよつと脇道に逸れました。

5・王道展開への過剰反応は義務なのです

お花の色は輝くような紅でした。

天然キザ男ことエリオさんは、一面に咲き乱れた花を気にしてないようだ。

私は直視できずにうつむく。まぶしい、まぶしいですエリオさん！いえ、幻なんですけどね。比喻表現なんですけどね。

でもお嬢さんって、お嬢さんって！

どこからつつこんだらいいのかわからない！！

慣れてないキザったらしさに心の中で暴れまわっていると、ブハツと噴き出す音が聞こえた。

……エリオさん、もしかして笑い上戸ですか。

いくら気配り上手でも笑いの衝動だけは抑えられないものなんですね。

それってちょっと危険だと思いますよ。人間関係に亀裂を入れかねないの意味で。

私がジトーっとした目で見ると、エリオさんは決まり悪そうに苦笑する。

「もう頭は痛くない？」

言われて、私は頭に手を持っていく。

そつえばすっかり忘れてた。魔法の副作用があっただった。今は少しだけ頭がくらくらするくらいで、痛いつていうほどじゃ

ない。

首を動かしたり腕を回してみたりと確認してみても、特に異常はないみたい。

直後はすごく痛かったし、便利な魔法な分、副作用も重そうだと思うってただけど、エリオさんが調節してくれたおかげかな？

私は大丈夫だと頷いて、指で円を作る。否定疑問文への保険として、一応。

そんなことしてもエリオさんはちゃんと汲みとってくれるだろうけど。

「よかった。じゃあ、動けるかな？
移動しながら、オレからも話すことがあるんだ」

私はそれにも頷く。いつまでも森の中にいるわけにもいかない。ここがどこか、本当に森なのかすら、私にはわからなかった。

周りに木しか見えないから森だっと思っただけで、もしかしたら大きな屋敷の庭かもしれないし、山の上なのかもしれない。

地理を知ってるらしいエリオさんについていってもいいなら、断る理由なんてなかった。

森の出口まで案内してくれるつもりなのかなあ。

立ち上がろうとして、私は前のめりに倒れる。

両手について顔面衝突はまぬがれたけど……やばい。

足、しびれてる……。

そんなに話してる時間は長くなかったはずなのに、見事にびりびりしてる。

私って正座慣れしてなかったんだね……。

真面目な話だったからって、正座なんてするんじゃない！

「大丈夫？ まだ具合悪い？」

エリオさんが心配そうに顔を覗きこんでくる。

傍目からだと言血を起こしたようにでも見えたのかもしれない。

勘違い万歳。足がしびれましたとか恥ずかしくて言えません。

や、しゃべれないから言えるわけないんだけども。

これ、立って歩けるのかなあ。

正座のせいでせき止められていた血が足を駆けめぐり、じんじんと熱くなってる。

数分くらいで元通りになるはずだし、悪いけどちょっと待ってもらおう。

そう決めて、私は足を前に出して三角座りをする。

エリオさんに顔を向け、両手をあわせてごめんなさいのジェスチャー。次に地面をぽんぽんと叩く。

もう少しここで休ませてください。

ジェスチャーで意思の疎通を図るのにも慣れてきた。

もちろん、エリオさんが察してくれるからこそだ。

法則を決めてないただの身振り手振りなんて、いくらでも解釈のしようがある。

ましてや他人以上知人未満。相手の思考パターンだってわからない。

エリオさんが私の一挙一動をしっかりと見て、判断してくれるから、私もうまく伝えられるようがんばれる。

そうじゃなかったら、きっとこんなに落ち着いてなんていられない

かった。

不意に視界に影が落ちる。

エリオさんの手が、私の額に当てられていた。

「んー、熱はないみたいだし、顔色も悪くないね」

熱を測るつもりだったらしい。いきなりはビックリするじゃないですか。

そりゃあ熱なんてあるわけない。足がしびれてるだけなんだから。恥ずかしいけど、素直に言ったほうがいいのかな。

でも、足がしびれてるなんてジェスチャーでどう表せばいいんだろう。

悩んでると、いつのまにかエリオさんは真正面から私の横っかわに移動してた。

「ちょっと我慢してもらえるかな」

何を？ と思った瞬間、びりびりつと足が電撃に襲われる。

叫ぶことすらできずに息を止めてる間に、私の身体は浮いていた。目の前にはエリオさんの整った横顔。直に感じる体温。高くなつた目線。

私はやっとなげ上げられたことに気づく。

……すみません、我慢できません。

足に！ しびれてる足にさわらないでっ！！

刺激を与えられた足が感電したみたいに痛くて熱い。

膝の裏を支える腕に当たらないようになって、重力に逆らえない私にできるわけもなく。

動けば余計にしびれるから、なるべく足に響かないようおとなしくしてるしかない。

エリオさんが足を進めるわずかな振動でもしびれが走って、泣きそうになる。

ゆっくり歩いてくれてなかったら、確実に悲鳴をあげてると思う。気を使ってくれてありがとう、エリオさん。

だましてるつもりはないんだけど、ごめんなさい。

これ以上恥かきたくないの、足がしびれてるだけだってことは一生秘密にさせてもらいます。

あ、王道展開に反応し忘れた……。

と私が気づいたのは、エリオさんが話し始めてからなのでした。

5 ・主道展開への過剰反応は義務なのです（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

書いててビックリなくらい話が脱線していきます。

6 ・私に選択肢つてあるんでしょうか？（前書き）

あらずじとタイトルを微修正しました。計画性がなくてすみません。
行き当たりばったりなので、また変更する可能性があります。

6・私に選択肢ってあるんでしょうか？

エリオさんは私を横抱きにしたまま、迷いなく歩を進める。
彼の中ではちゃんと目的地を決めてあるみたいだ。

「まずは君が気になってそうなことから話そうか」

足のしびれを感じなくなってきたころ、エリオさんは口を開いた。
少しでも振動を減らそうと彼の首に手を回していたから、顔も近くて声も近い。

ちよつと低めで、なのにやわらかく響く声。美形にふさわしい美声です。

私が気になってること？

ここはどこなのかとか。自分は誰なのかとか。エリオさんは私のこと疑ってたりしないのかとか。

今どこに向かっているのかとか。これからどうするつもりなのかとか。

やっぱリケメンにお姫さま抱っこは標準装備なのかとか。

……気になることなんていくらでもありすぎて、脱線してきた。

「ここは彩佳さいすいの国の南にある緑里りょくりと呼ばれる地。の、隅っここのほうの田舎。

この森はルーの森と呼ばれてて、緑里の中でもさらに南に位置してる。

ずっと南に下れば国境沿いに栄えた口カリス市街があつて、そこ

を越えると皓兎こうとの国。

今いるところからだ、北西の方角に少し歩けばソラナっていうのどかな町に出るよ」

エリオさんは丸暗記してるみたいにすらすと説明する。
あまりにすらすらしすぎて、右耳から左耳に抜けていっちゃいそう。

「聞き覚えあつた？」

前を向いていたエリオさんがうかがうように私と目を合わせる。
私が記憶を思い出すきっかけになれば、とわざとたくさん地名をあげてくれたみたいだ。

残念なことに、全然まったくもってありません。

国の名前も里の名前も、森も町も全部。

ふーんそんなところがあるんだ、で終わっちゃった。

私が首を振ると、答えを予想してたらしいエリオさんは一つ頷く。
一応確認しただけ、だったんだろうな。

「オレと君は初対面だよ。」

オレがここに来たとき、君は一人でぼんやりしてた。

君の名前も、どこの誰で、何のためにここにいたのかも、全部オレにはわからない」

これは私のほうが予想してた答えだ。

知り合いだったら、もうちょっと違う対応をしてたと思う。

たとえば質問するのに了承を取らなかったり。たとえば有無を言わずこの場を移動してたり。

私への態度にところどころ遠慮が見られる。親しき仲にも、的な

ものじゃなく、他人に向けるような。

エリオさんみたくはいかないけど、私にだってそれくらいは察せられた。

「ただ、そもそもオレがここにいるのは、仕事仲間から依頼を受けたからなんだ」

エリオさんは急に話を変えた。

依頼？ 初耳だ。

というより、私はエリオさんのことを名前しか知らない。

どこで何をしてる人なのかとか、年齢とか種族とかスリーサイズだとか……最後のは必要ないね、うん。

とりあえず仕事仲間がいるってことは、何かの仕事はしてるらしい。

「十日ほど前から、この森に本来あるはずのないものが発見されるようになったらしい。

最初は小さな指輪。次に靴、ぬいぐるみ、一昨日は小鳥」

森の中でそんなこまごましたものを見つけられるなんてすごいなあ。

見た感じとっても広そうなのに。魔法が何かで探知できるものなのか。

でも、小鳥が森にいたっておかしくない気がする。

他のものも、誰かの落とし物かもしれないし。

あるはずのないもの、なんてどうして言いきれんんだろう。

「この森は少し特別だね。タクサス オレの仕事仲間が、常に目を光らせてる。

頭は堅いけど、タクサスは優秀だよ」

タクサスさん、初めて聞く名前だ。

その人がいつも守ってる森だから、あっておかしくないものがあるはずのないものくらい、ちゃんと見分けられる自信があるのかな。私にとってすごい人のエリオさんが優秀だって言うと、とんでもなくすさまじい人みたいに思えてくる。

怖いもの見たさで会ってみたいなあ……。

「それらはどれも微量の魔力をおびていて、タクサスは遠くから転移されてきたものにとらんでる。

いろんな国を見て回ってるオレならどこのものかわかるかもしれないから、見てほしい。って頼まれたんだよ」

なんだか話の流れがつかめない。

この森にあるはずのないものは、どこからびゅーんって飛ばされてきたもので。

指輪だとかぬいぐるみだとかの特徴から、何かわかったりするかも、ってエリオさんが呼ばれた。

どうやらエリオさんは、優秀なタクサスさんが知恵を借りようとするくらい博識らしい。

タクサスさんをお願いされて指輪とかを見にきたはずのエリオさんが、森にいるのはなんでなんだろう。

調査しにきてたのかな？ 私を見つけたのも偶然？

「このまま東に行けばタクサスの屋敷がある。

そこで話を聞いている最中に強い魔力を感じて、オレが様子を見にきたら、君がいたってわけ」

エリオさんはそう言って真正面に目を向ける。

目的地はタクサスさんのお屋敷だったんだ。

でも、強い魔力って……私が魔力をおびてるってこと？

自分じゃ全然そんな感じはしない。

エリオさんが魔法を使ったときも、光っててきれーとか、何か呪文みたいの唱えてるから魔法かなあって思っただけで、そういう力を感じたわけじゃなかった。

私に魔法の才能がないからなのかな。期待してたわけじゃないけど、ちよつとしょんぼり。

「君がここにいた理由は、オレが受けた依頼と関連してるのかもしれない」

というか、ほぼ確実にね。とエリオさんは言葉を足す。

あ、そこに話がつながるのか。

今まで転移されてきたものと同じ場所で発見された、同じように魔力をおびてる私。

何かしら関わりがあると考えたほうが自然だ。

私が最初にエリオさんに見つけてもらえたのは、たぶん偶然なんかじゃない。

当事者のはずの私は記憶がないから、本当にそうなのかわかるわけもないけど。

頭のいいエリオさんには他にも何か見えてるのかもしれない。

「君に行くあてがないなら、オレたちに保護させてほしい。

当面の衣食住と身の安全を保障するよ。

その代わりに協力してもらえるとありがたいんだけど、どうかな？」

エリオさんはやわらかな笑みを浮かべて、提案してきた。

これ、私に選択肢ってあるんでしょうか？

6 私に選択肢つてあるんでしょうか？（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

7・選択肢は用意されてなかったようです

エリオさんの優しい声が耳の裏に残ってる感じがする。

私は何も考えずに頷きそうになるのを、ぎりぎりのところで踏みとどまった。

保護。衣食住と身の安全の保障。

他に頼れる人のいない、もしあったとしてもわからない私には、願ったりな申し出だ。

むしろ、私にとつて都合がよすぎるんじゃないだろうか。

旨い話にや裏がある。馳走終わらば油断すな。

そんな言葉が頭をかすめた。

ただ、困ったことにエリオさんを怪しむ気持ちはこれっぽっちもわいてこない。

エリオさんはいい人。

出会って一時間も経ってないのに、私の中で疑いのような事実になってる。

そりゃあ、100%善意ってわけじゃないだろうなあとは思っけど。

現に、エリオさんは『協力してほしい』って言った。

私がすぐに頷かなかった理由はそれだ。

話の流れからして、エリオさんが受けた依頼についてことだろう。

たしかに、こっちが一方的に助けられるっていうのはすごく心苦しい。

魔法で言葉が理解できるようにしてくれたり。知らないこといっぱい教えてくれたり。もう十分すぎるくらい色々してもらってるから。

ギブアンドテイクならいいかなあ、なんて気も楽になったりする。

でもね、ちよつと待つてほしい。

協力って言われても、私は何にも覚えてないわけで。

どう協力すればいいのか、そもそも協力できることがあるのかもわからない。

それって、結局タダでお世話になることにならない？

なんて思っちゃうわけだ。

交換条件の意味ないじゃん！ テイクアンドテイクじゃん！

私は心配になってきていた。

エリオさんがありえないくらいいい人すぎて。

もし私が嘘ついてたりしたら、どうするんだろう。

簡単にだまされる人には思えなくっても、万が一ってこともあるはず。

正直、私に選択肢なんてあつてないようなものなんだけど。

というか本当に全然まったくもつてないんだけど。

自分の身なんかよりそっちが気になっちゃって、私は返事ができずにいた。

何も反応しない私に、エリオさんは苦笑する。

疑われてるって思ってるのかな。

「実を言うと、オレは君を見つけた時点で、すでに保護する義務が

あるようなものなんだ」

へ？ 義務？ いきなり何？

たぶん、私はすごくマヌケ顔をしてる。

義務って、立場上とか身分上、しないといけないことっていう意味の義務だよな。

道徳的なものとか社会的なものとかたくさん種類はあるけど、それを放棄した場合は罰せられたり、エリオさんが何かしらの不利益を被るってことだよな。

どこの誰かもわからない私を保護しないといけない義務って、どんなの？

そんなへんてこな義務を持つエリオさんって……何者？

「《賢者》って言ってもわからない、かな」

重要っぽいキーワードが出てきた。

賢者。賢い人。言葉の意味自体はわかる。

でも、エリオさんの言う《賢者》には、それ以上の意味があるような気がする。

やっぱりというか、含まれてるものがなんなのか、私には予想もつかない。

国や町の名前を聞いたときにも感じた、違和感。

言葉の意味は、魔法のおかげで理解できる。

けど、固有名詞についてはその限りじゃないらしい。

ここでは一般常識とされてるようなことが、何にもわからない。

違和感は、実はそれだけじゃなかった。

しゃべれなくても、私の思考回路は正常に動いてる。

エリオさんの言葉に納得したり、おかしいって感じたりしてる。それは私の中に、私にとっての一般常識や、いつ得たのかわからない知識が根づいてるってこと。

そのせいで、ずっと、思考に感情がついていけない違和感があった。

「詳しい話はタクサスの屋敷で、と思ってたけど。

《賢者》についてくらいは軽く話しておいたほうがよさそうだね」

エリオさんは私を安心させるように笑いかけてくれた。

……不安がってたの、気づかれたかな。

とりあえずは、説明してくれるならちゃんと聞こうと、私は視線で先を促す。

一つ頷いて、エリオさんは私を抱え直す。……うん、抱え直された。

そういえば私、お姫さま抱っこされたままだった！！

ぬくぬくとした体温だとか、意外とがっしりしてる腕だとか。

色々と気づいちゃうとね、こう、いたたまれなくなってくるわけです。

王道展開に反応するの、今さらすぎますがすっかりきっぱり忘れてました。

美形な男性にお姫さま抱っこされたら、きゃー降ろしてー！って大騒ぎするのがお約束なのに。

きゃーって悲鳴をあげるためには特訓が必要ですけど。

なんて、思考が脇道にそれまくったかいもあった。

記憶がないことへの不安も恐怖もいつのまにかどこかにすっ飛んでっちゃってた。

私って、シリアスに向いてないみたい。

こういう状況でも深刻になりすぎずにすむから、得な性分なのかなあ。

もう、いいや。開き直ります。

まずはエリオさんのお話をちゃんと聞きます。

説明受ける前に気持ちを切りかえられてよかったよかった。

「神々に最も愛されし者。

《賢者》は一般的にそう称されてる」

エリオさんは淡々と他人事みたいに話す。

なんだか……すごく……うさんくさいです。

神々って、宗教ですか。私、勧誘されてるんですか。

思わず胡乱な目を向けた私に、エリオさんは曖昧な笑みを返してくる。

「簡単に言うと、人民を善き方へ教え導くようにって神々から力を授かった人たちのこと。

オレは《賢者》の一人。

君を放っておいたりしたら、神様にどやされるよ」

どやされる……ずいぶん神さまに対してフレンドリーですね。

エリオさん、すごい人だとは思ってたけど、本当に選ばれた存在だったみたいだ。

神さまに愛されてるなんて言うわりに、エリオさんがその神さまを崇めてるようには見えない。

バチが当たる、とかそんな軽い意味合いなのかな。

助けられっぱなしでも気にするなって？

勧誘されてるわけじゃないなら実害はなさそうだし、神さまうんぬんはひとまず気にしないでおこつ。

「保護って言っても、生活に不自由しないよう取り計らうっただけ。君が望むなら、身寄りのない人のための施設を紹介することも、住み込みで働ける場所を探すこともできる」

とことん至れり尽くせりだなあ。

《賢者》って何でも屋みたいなものなんだろうか。

エリオさんが優しくすぎるんじゃないかと、《賢者》だから優しくしないといけないの？

優しくするのが義務なんて考え方は、ちょっと寂しい。

やっぱりそういうの関係なく、エリオさんは優しい人だと思う。

「ただし……」

エリオさんは私の注意を引くために、そこで一旦口を閉ざした。重要なことを言おうとしてるんだって私でもわかる。

あんまり緊張してないのは、エリオさんの持つ穏やかな空気のおかげ。

真剣な顔をしたエリオさんから目をそらすことなく、私は続く言葉を待つ。

「君が協力してくれるなら、自分のことを思い出せる可能性は確実に高くなるよ」

さて、ちょっと情報を整理しようか。

私は何にも覚えてなくて、森にいた理由もわからない。

エリオさんいわく、森で見つけられた出所不明の品々と関係して
るだろうとのこと。

協力するなら、思い出すための手助けをしてもらえらしく。

協力しない場合は……自然に思い出すのを待つしかない、ってこ
とだね。

……うん、そっか。そういうことか。

私に選択肢が用意されてないのはすごくよくわかりました。

8・荷物なら恥ずかしくないのです

こうなったら、なるようになれ、だよね！

私は色々とあきらめたり吹っ切ったりして、エリオさんに協力することにした。

少しでも自分のことがわかる可能性があるなら、それにかけたい。過去なんてどうだっていい。と迷いなく言える人はほとんどいないと思う。

そんな台詞は、運命のイタズラによって惹かれ合いながらも、血塗られた過去を持つ穢れた私はあなたにはふさわしくない……って身を引こうとする乙女に王子さまが真摯なまなざしで告げるものだって相場が決まってる。

血塗られてるのに乙女？　なぜに相手役が王子さま？　なんてツッコミはご遠慮願います。

きつと心は清らかなんですよ！　もしお相手が騎士さまだったりしたらそっちこそリアルに血塗られてるじゃないですか！

というか今いっぱいばいで妄想力が働かなくなってるんだよ許してっ！

と、まあ、私は乙女に恋する王子さまじゃないので。過去がわからないのはやっぱり怖かったりする。

協力しますよ、させていただきますよ。どう協力すればいいのかわからないけど。

藁にもすがる思いってこういうことを言うのかな。

藁は藁でもエリオさんはとっても丈夫な藁な気がするよ！

これだけ言うってことは、ちゃんと協力できることがあるんだろうし。

エリオさんにも得があるのなら、必要以上に気に病むこともない。助けてもらった分、お返しすればいいんだから。

「えりおさん」

私は教えてもらった名を呼んで、目をあわせてしっかりと頷く。それだけで意志は伝わったみたいで、エリオさんは表情をゆるめた。

「ありがとう。少しでも嫌だと感じたらいつでも言ってほしい。

君に負担がかからないよう尽力するよ」

やわらかな声にはエリオさんの気遣いがたつぷりにじみ出てる。それに関してはあんまり心配してなかったりしつつも、私は笑って応えた。

さすが、イケメンはマメだなあ。

同じ美形でもエリオさんは王子さまより騎士さまタイプな気がする！

人の身に収まらないほどの力を生まれ持ってしまったゆえに病弱なお姫さまを案じて、常に傍にひかえてる騎士さま。

姫の憂いを少しでも取り除けたらと、面白おかしく噂話を語ったり、陽気にふるまったり。

いつしかそんな騎士さまに姫さまは惹かれて……うん、おいしい。

その場合、私は侍女Cにでもなって二人を観察してたいです。

なんて妄想で遊べるくらいには、私の神経は図太いらしい。
非常事態にもかかわらずエリオさんを鑑賞してたりね。妙にシリ
アスにもひたりきれてないしね。

もちろん、落ち着いてられるのはエリオさんのおかげでもあるけども。

私はそんなにヤワじゃない。過去の自分を知らなくっても、なんとなくわかる。

だから、負担だとかそういう心配はいらないのです。

エリオさんなら悪いようにはしないだろうし、大丈夫。

そう、無条件に信じちゃったりしてる部分もある。

刷り込み？ その可能性も否定できません。

だいたいね、記憶もこの知識もなんにもない私なんて、エリオさんにとっちゃ赤子同然だと思うのです。

エリオさんの声や話し方は、優しいのに確かな芯がある。

話術がすごいのかは私にはよくわからないけど、なるほどって納得させられちゃう。

私の意思関係なく協力させることもたぶんできたんじゃないかな。

質問するときだって、なんだって。

エリオさんは毎回ちゃんと、私に聞いてくれた。

話せない私の表情や動作から、思いを読みとってくれた。

気配り上手で、名前を教えてくれて、笑顔がちょっとかわいくて、天然キザ……は置いといて、とにかくいい人。

そんな人を疑えっていうほうが私には無理な話だよ。

「協力内容に関しては、タクサスも交えて話し合わないよね」

何をすればいいか説明してくれなかったのは、まだ決まっていなかったかららしい。

そうつけ足した声のトーンは少し明るかった。

私が承諾したことではっきりとしたのかな。選択肢なんてなかったよ
うなものだと思うんだけど。

まあ、エリオさんがうれしいなら、別にいいかあ。

「もうすぐ屋敷が見えてくるはずだよ」

エリオさんの言葉に進行方向に目を向けてみる。

……相変わらず木しか見えません。

この森 ルーの森、だっけ？ かなり深いみたいだ。

木々のすき間からわずかにこぼれ落ちてくる日の光。

行けども行けども周囲に広がるのは草木ばかり。

さっきからほとんど同じ景色なのに、何を目印に進んでるんだろう。

あ、《賢者》だとかっていうすごい人みたいだから、いわゆるチ
ート能力？

そう考えれば色々納得、かも。

知識を移す魔法とやらも、簡単に使えるものじゃなさそうだった
し。

普通なら私みたいな一般人が気安く接していい人じゃない感じがし
てきましたよ。

緊急事態だから情状酌量の余地はあるはず！

パサ、と目の前で音がした。

私の顔めがけて落ちてきた大きな葉っぱをエリオさんが払った音
だ。

ビックリして目を瞬かせてると、「大丈夫？」と心配そうな声が降ってくる。

うまく回らない頭で、それでも何度も頷く。

エリオさんが払う音で、葉っぱが落ちてきてたのに気づいた。

私って鈍いのかな。ううん、きつとエリオさんが鋭いだけだね。垂れ下がった枝や長く伸びた草も、人一人抱えてとは思えないくらい器用によけてる。

私、重くないのかな？ 自分で歩いたほうがいいんじゃないかな？ これ以上迷惑もかけたくないし、降ろしてもらおう。

ちよいちよい、エリオさんの襟巻きを引いてこっちを向いてもらう。

足を軽くぱたぱたと動かして、それから地面を指さす。

自分で歩けるので、降ろしてください。

これくらいのジエスチャーはエリオさんになら伝わるはず。

タクサスさんだかの屋敷はもう近いらしいから、歩けない距離じゃないと思う。

そもそも足がしびれてただけで、具合なんて悪くなかったし。

正直お姫さま抱っこも恥ずかしいしね！

エリオさんは考えるように視線をさまよわせてから、口を開く。

「あと少しだから、我慢してもらえるかな。
森を裸足で歩くのは危ないよ」

……へ？

私は自分の視界に入るように、抱えられてる膝を伸ばしてみる。

……なんにも履いてない肌色が見えた。
全っ然、気づかなかった！

記憶がないこと。話せないこと。エリオさんのこと。これからのこと。

たくさん驚くことがあつて、たくさん考えなきゃいけないことがあつたから。

自分の格好とか、全然見てなかった！
すっかりすぎるよ私！

イケメンにお姫さま抱っこは標準装備なのか、なんて思っちゃつてごめんなさい。

草とか石ころで足を傷つけないように、だっただなあ。

色々つつこみたかったけど、いさぎよくあきらめて荷物に徹しよう。

私は荷物です。荷物ったら荷物なのです。

荷物なら恥ずかしくない！

9・お日さまはあたたかくてやさしいものです

現実逃避ついでに、自分の背格好を確認してみよう。

上は、紺色の地に白と水色の小花柄の布を前で重ね合わせて、黄色い帯で締めてる。たつぷりと広がった袖口や襟元からレースが覗く。

帯から下は薄手でさらさらとした軽い質感の布が膝までおおってる。今は膝裏を支えるエリオさんの腕でまとめられてるけど、布がかさばってる気がする。普通に歩いたらひらひらして邪魔そうだなあ。

後ろ髪を一房つまむ。黒髪ストレート。体勢のせいで正確にはわからないけど、長さはたぶん腰に届くくらい。

体型は、太ってはない、と思いたい。現在進行形で運ばれてるのに重かったら嫌だ。

胸は……………なくはない、よ！

ちよっと服と帯でつぶされてるだけだよ！

……自己弁護って、ちゃんと言葉を選ばないと自爆するよね。

むなしい気持ちをやりすごしてから、目を閉じて小さく息をつく。

うん。これが、私。

すごく、不思議な感じ。

自分じゃないようで、やっぱり自分。

似合ってる気がしない女の子らしい服装も。手入れが大変そうな長い髪も。つるぺ……………ひかえめな肉づきも。

ちゃんと、自分の姿だつて、違和感なく認めてる。
鏡はないから確認できないけど、きつと顔を見ても同じ気持ちになるんだろうつて予感がした。

「見えてきた」

エリオさんの声に顔を上げる。
周りは木が少なくなつてきてて、ちよつと先に草の生えてない道があつた。

その道を視線でたどると、茶色い落ち着いた外観の大きなお屋敷。
……タクサスさん、お金持ちなんですね！

ふ、と変なものが視界をよぎる。

あれ？ お屋敷を変な膜がおおつてる？
しゃぼん玉みたいにいろんな色が混じつたマール模様マール模様の光の膜。
それはお屋敷を中心にして、半球状に広がつてる。

緊張するような、気持ち悪いような、心がささくれ立つような。
とにかく、すごく嫌な感じがした。

思わずエリオさんの襟巻きをぎゅつとにぎる。
エリオさんはしゃぼん玉も、私の手も気にしてないようで、歩くスピードは変わらない。

近づいてくほど、嫌な感じもどんどん強くなってくる。

タクサスさんに会うために、このお屋敷に入らないといけない。
わかつてても、行きたくないってこねたくなる。
あと、だいたい五メートル。三メートル。……。――

膜にふれる瞬間、すぐるような思いでエリオさんを見上げる。
バチツとしっかり目があって、私は驚いた。

エリオさんの瞳、きんいろ……？

何度も見てたはずなのに、どんな色だか知らなかった。色を、認識できてなかった。

こんなにきれいな色だったんだ。

はちみつ。マーマレード。レモンジュレ。山吹色のお菓子。
うーん、違うなあ。

あたたかくて、やさしい お日さまの色。

恐怖とか、嫌な気分とか。

お日さまの光に照らされて、全部消えていく。
とたんにおそってくる脱力感。

体の緊張がほぐれたからか、一気に眠くなってきた。

重いまぶたのせいで見えなくなっていく金色を残念に思いながら。
ふわふわする意識の中で、私は心から納得していた。

エリオさんの笑顔や声に安心できたのは、お日さまだったからな

んだね。

9 お日さまはあたたかくてやさしいものです（後書き）

短いですがキリがいいのでいったん切ります。

服装は和風ゴシック的なものだと思っていただければ。

十話 二人の賢者（前書き）

視点ががらつと変わります。

これから話数が漢数字のときは三人称視点になります。

十話 二人の賢者

ペリドットのような瞳が完全に見えなくなつたのを確認して、エリオは小さく息をついた。

別に呆れているわけでも困惑しているわけでもない。
ただ、気分を切り替えるため。

……いや、呆れているといえは呆れているかもしれない。
腕の中の少女の、警戒心のなさに。

この屋敷に常に張られている結界は、大きく分けて二つの効果があった。

一つは、害意を持つ者を寄せつけなくするもの。これは目視できないほど薄く広範囲に広がっていて、もし網にかければ森をさまようはめになる。

もう一つは、結界内では姿を偽れなくするもの。そのせいでエリオも瞳の色を隠せずにいる。

目立つからと外ではいつも軽い暗示をかけているだけで、ここなら特に不都合はない。

けれど、今はあともう一つ、術がかけられている。

これまでに飛ばされてきた指輪や靴などと同じ魔力をまとう存在を、眠らせるもの。

結界を維持しているのは屋敷の主のタクサス。

さっきまではなかった効果に気づいたとき、対象となる少女には悪いがエリオは安心した。

排除しようとせず、傷つけることもなく、だからといって無策では招き入れない。

この非常事態の中でも、冷静さを失ってはいないようだ、と。

もちろん彼の判断力を疑っているわけではないけど、今回は何があっても不思議じゃなかった。

何しろタクサスの大切な存在が深く関わっているんだから。

彼女も結界には気づいていたみたいで、屋敷に近づくほどその身を固くしていた。

視えていたのか、感じていたのか。どちらでも大した違いはない。自覚はないようだったが、少女自身かなりの魔力を宿しているのだから、気づかないほうがおかしいだろう。

協力を求めた以上、エリオには彼女を守る義務がある。

もし結界に攻撃的な術が込められていた場合、少し強引にでも破らないといけなかった。

純粋な力ではタクサスに敵わないとわかっているから、心配していた。

眠らせる術を黙認したのは、タクサスにもこの少女を信用してもらったためだ。

彼は自分で見たもの感じたものしか信じないと、付き合いの長いエリオは知っている。他人に流されず己を持つことは、『賢者』として当然のこと。

この少女の協力は必須。だから、タクサスの目で害はないと判断してもらうしかなかった。

まあ、害がないって決まったわけじゃないんだけどね。

あどけない寝顔を眺めながら、心中でつぶやく。

無害だと断定するには、情報が少なすぎる。

すでにこちらに被害がある以上、彼女自身も被害者だという可能性があっても、完全に信用することはできない。

絶対、なんてない。それが《賢者》としてのエリオの考えだ。

エリオ個人としては、また違う感想も抱いていたりはするのだけ
れど。

さしあたって今やるべきことは、タクサスへの報告と、相談。

屋敷を仰ぎ見て、中の彼の気を探る。

遠くにいてもはつきり感じられるほどのまばゆい紅は、今はかすかに色が鈍い。

さすがの彼も、少し疲れているらしい。

さらに厄介事を持ち込もうとしていることに心苦しさを覚えなくもない。

巻き込まれた側の自分が気を回すのもおかしい話だろうか。

瞬きを、一つ。

それだけで目に映る景色は一変した。

屋敷に続く道ではなく、広い室内。ほんの数十分前まで自分がいた、屋敷の主の部屋。

扉と対峙するように配置された執務机。そこに両肘をつき、考え事をしているのか口の前で手を組み、彼は座っていた。

後ろで一つにまとめられた長いダークブラウンの髪。強い意志を宿したガーネット色の双眸。

いきなり現れたエリオにも彼は驚いた様子を見せない。まあ、今さらか。

「タクサス、連れてきたよ」

彼は目線だけで頷き、立ち上がる。

お互いに距離を詰めると、タクサスはエリオの腕の中の少女に手を伸ばす。

小さな額に軽く手を置いて、目を閉じ。すぐに深いため息をはいた。

「間違いないな」

「当たり前でしょ」

じやなきや最初から連れてこない。

直接ふれなくても、彼女の気なら結界から伝わってきただろうに。石橋を叩いても中々渡らない、と他の賢者に揶揄されていたのを感じ出す。

「疑っているわけじゃない。

何が起きているか分からない今、万全を期すのは当然だ」

少し不機嫌そうに、タクサスは言う。彼らしい正論だ。

すっかりいつもの調子を取り戻していることにエリオはほっとした。

さつき……エリオがここを出る時の彼は、ひどい顔色をしていたから。

「みどりちゃんは大丈夫だった？」

その名前に、タクサスの片眉がぴくりと動いた。

「部屋に寝かせてる。数日は目を覚まさないだろう」

「……そっか」

とりあえずは、大事なようでよかったと言っべきか。
エリオは曖昧な笑みを返した。

タクサスはエリオが抱えている少女をじっと観察している。
その様子からは怒りも憤りも、なんの感情も読み取れなかった。
彼女に説明するためでもあったけど、落ち着けるようにゆっくり
移動して時間を稼いだのは正解だったみたいだ。
それでも、文句の一つくらいは言いたいかもしれない。
ただ……その相手は。

「彼女じゃないよ」

「根拠は？」

断言すれば、間髪入れずに重ねられる声。
とことん無駄をはぶいた問いにエリオは苦笑する。

「詳しく話すためにも、まずはこの子をちゃんと休ませてあげないと。」

「すぐに使える部屋はあるかな？」

「お前の東側の隣だ。」

念のため、ラピスに調えさせておいた」

質問の形をした確認の意図を、タクサスは正確に読み取ってくれ

たようだ。

この少女をしばらくこの屋敷に滞在させよう、という提案を。
一を聞いて十を知ってくれるのは楽でいい。

みどりの介抱。結界の修復と効果の追加。部屋の用意。

エリオが行って戻ってくるまでの短時間でよくここまで、と素直に感心する。

けれど、隣の部屋ということは。

それってオレに面倒見ろってことだよな。

エリオも言外の意味を察してしまい、つきそうになったため息を飲み込んだ。

タクサスには優先するべき義務が、守るべき対象がある。
乗りかかった船だ、仕方がない。

こうなったらとことん巻き込まれてあげよう。

どうせ今さら、《賢者》としてもエリオとしても、見て見ぬふりなんてできないんだから。

「寝かせてきたらすぐ戻るよ」

話はその後で、だ。

強制的に眠らされたとはいえ、この少女自身の疲れもあるように見えた。

すぐに済むはずないのはわかりきっているし、彼女には聞かせられない話だってある。

部屋を用意したのは、そういった事情も含まれているんだろう。

目線だけで合意をもらい、扉に向かおうとして……気づいてしま

った。

エリオはいたずらっぽく笑み、タクサスに向かって手を伸ばす。仕返し、というわけじゃないけれど。

「その間に、髪、結びなおしておいたら？」

そう言って、彼の跳ねた横髪を軽く引つ張った。

不意をつかれたタクサスの表情が、次第に苦々しいものに変わっていく。

いつもは性格を表すようにきっちり結ばれている髪は、今はところどころ乱れていた。

格好は、良くも悪くも気を左右するものだ。

隙のない服装で勤め、ゆつたりとした服装で眠る理由。

着飾ることに興味のないタクサスも、きちんと理解しているはずで。

そこまで気が回らなかったくらいには、彼も動揺していたらしい。

無理もない。とエリオは思う。

退室し、用意された客室に向かう道すがら。

あわただしく、扉を使わずに部屋を出ることになった、一時間ほど前を振り返る。

落ち星のような魔力の塊が、この世界の御子を襲った瞬間を。

十話 二人の賢者（後書き）

落ち星：隕石のようなものだと思います。多かれ少なかれ魔力を秘めています。

十一話 回想 - 異世界からの落ち物 -

目の前に並べられている品々を、エリオは一つ一つ手に取って確かめる。

まず、かわいらしい指輪。

白金で作られた華奢な意匠に、明るい黄緑色の輝石。サイズからして女性向けのものだ。

次に、刺繍の施された布靴。

硬質な茶色の布に、蔓と白い花の刺繍。こちらも女性用だろう。新品ではないようなのにあまり汚れていないから、室内履きなのかもしれない。

70

そして、魚のぬいぐるみ。

青と水色の肌触りのいい布で、平べったい海水魚を模して作られている。

間の抜けた表情はかわいらしいと言えなくもないような……なんというか、コメントに困る。

ぱつと見、なんの変哲もない指輪と靴とぬいぐるみ。

けれど全てに共通するものがある。

同じ者の魔力の色を、まとっていること。

一部に、エリオが見たこともない技術や素材が使われていること。

「この世界の物じゃない可能性が高いね」

エリオの言葉に、テーブルを挟んだ向かいの長椅子に座っていたタクサスは、小さく息をついただけだった。

彼は詳しく話せと視線だけで先を促してくる。言わなくても伝わる相手の場合、言葉をはぶく癖はどうにかならないもんなんだろうか。

「指輪の石は傷がつきにくいように加工されてる。

靴の刺繍に使われている糸と、ぬいぐるみのエラ部分の布は、たぶんこの世界のものじゃない」

エリオは仕事柄、服飾に使われるような技術や素材はほぼ見知っている。普段はそういった用途で使われないものや、辺境の里などでのみ使用されているものなどはさすがに厳しいが、それが三つもそろうというのは偶然にしてはできすぎている。

石の加工は、こちらの世界なら簡易的な防護の魔法を使えば済むようなものだ。その分当然値段も上がってしまうものの、この輝石は透明度が高く、値打ちもののようだ。それこそ、魔法で守られていないほうが不自然なほど。

加工の仕方の詳細はわからない。どういった効果があるかだけ、だいたい見て取れる程度だった。

「異世界、か……」

タクサスは難しい顔をして腕を組む。

あまり驚いてはいないようだ。それも当然か。エリオとは得意分野が違うけれど、彼だって優秀な《賢者》なのだから。

神々に最も愛されし者だとか、神の心を宿した者だとか、神の遺した叡智だとか。周りから好き勝手に称される《賢者》は、どうしたって厄介事に巻き込まれやすく、自然と鼻が利くようになる。

慎重派なタクサスは、第三者による確たる裏づけが欲しかったん

だろう。

「予想はしてたみたいだね」

「今、お前が指摘した理由からではないがな」

エリオの言葉を肯定しながら、彼は隣に目を向ける。同じ長椅子に座っている、緑の髪の少女へと。

彼女はその視線を受け、手を顔の前にかかげた。

風を切るような音がして、細く綺麗な指先に、鮮やかな羽色の小鳥が止まる。

話に聞いていた、一昨日落ちてきたという小さな生物。

「あのね、小鳥さんの名前がわからないの」

左右で明るさの違う青の瞳を、まっすぐ向けてくる。

困っているような、途惑っているような色をにじませて。

その言葉と表情の意味するところを察し、エリオは再度小鳥に視線を移す。

「……みどりちゃんが干渉できない存在、ってことか」

豊かな常緑の髪を背に流し、空と海を片目ずつに宿した少女は、ただの人ではない。

十年ほど前、タクサスが保護した《世界の御子》。

前例がないため、いまだに彼女の潜在能力は計りきれておらず、謎が多い。

この世界でただ一人、神々ではなく、世界そのものから生まれた存在。

世界に育まれたすべての生命と、彼女はつながっている。

彼女からの干渉を拒むことはできない。その生の根源にある名を、彼女の前で隠すことはできない。《賢者》であるエリオやタクサスでさえ。

にも関わらず、鳥の名前がわからない。

それは、この世界とのつながりを持たない生物だからなのではないか。

タクサスは、そう仮説を立てたんだろう。

「異世界からの落ち物となると、厄介だ」

厳しい表情で告げられた言葉に、エリオも同意するしかない。

異世界の物や人がこちらに紛れ込むことは、まれにある。

それらを落ち物や落ち人と呼ぶ理由は、一番最初に見つかった物が空から落ちてきたからだとか、どれも落ち星のように魔力を秘めていたからだとか、言われているが。

“故意に”落とされてきた物は、もしかしたら初めてかもしれない。

どうあっても、面倒事であるのは確かだ。

「あちらの目的がわからないから、今後の出方もわからない。

そうなるとどう対処したものかもわからない、と」

異世界の物ということ以外、こちらは何も知らない。向こうは次元を越えて物を飛ばせるほどの力を持つというのに、だ。

情報が足りないせいで、どうしても後手に回ってしまう。

今はまだ、これといった被害は出ていないけど。

このまま放っておいていい問題ではない、とエリオの勘は告げている。

「どう思う？」

「少なくとも、これで終わりじゃないだろうね」

タクサスの問いに、エリオは自分の考えをすばやくまとめて答える。

「短期間に四つ、同一人物によって落とされてきたんだ。理由なくこんなことをするとは思えない」

十日という短い期間。同じ場所に、同じ魔力をまとった落ち物。偶然のわけがない。理由がないわけもない。

落としてきた物、もしくは落とす行為自体に、何かしらの意味があるはずだ。

「ここに落ちてきた理由は明白だよね。」

相手はこの世界に間違いなく飛ばせるように、みどりちゃんに焦点を合わせてる」

《世界の御子》はこの世界で一番世界に近い。

それは、見方を変えれば世界の中心ということと同義なんじゃないだろうか。

どんな術でこちらに物を落としてきたのかはわからないけれど、術者はみどりを目印にしたんだろう。

「失礼しちゃうなあ」

緊張感のないみどりの声に、エリオは毒気を抜かれる。

その気になれば世界を掌握できるほどの力を秘めているかもしれないのに、彼女からそんな脅威は感じない。

世界が人の過ちも悪行も黙して受け入れるように。

みどりはかわいらしい外見にそぐわず、どこか泰然としたところがある。

そのおかげでエリオたちもいつもの調子を崩すことなくいられるのだけだ。

タクサスがエリオの協力を仰いだのは、他でもない少女のためだ。彼も、相次ぐ落ち物に、彼女が関係していると当然気づいた。いざというとき、彼女を任された者として、《世界の御子》の保護を最優先にせざるを得ない。

だから、うかつに一人で動くわけにはいかなかった。

エリオ以外にも数人、すでに連絡は取ってあるらしい。

比較的自由に動き回れるエリオが一番乗りなのは、自然の流れかもしれない。

頼られた以上、エリオは全力を尽くすつもりでいる。

同じ《賢者》として力になりたい。

それは友人だからというだけではなく、彼に手を貸すことで、救えるものの大きさを知っているから。

何か、見落としてはいないだろうか。

どこかに、手がかりが隠されてはいないだろうか。

エリオは卓の上に目をやる。

並べられている物。指輪に、靴に、ぬいぐるみ。

みどりの指に止まったままの小鳥。

魔力の濃度が増しているように見えるのが、時間の経過のせいだけではない。

「一つ、気になるのはさ。

だんだんと大きな存在を送ってきてるってことなんだよね。

「昨日なんて物から生物になつてる」

初めの三つは、指輪の石自体の魔力は計算に入れず、単純に体積を見てみれば明白だ。物が大きくなるにつれ、まどっている魔力も強くなっている。

鳥は小さいけれど、無機物と生き物とでは事情が変わる。命あるものを飛ばすのは容易ではないはず。過去に発見された落ち物も無生物が圧倒的に多かったのだから。

それは、大きい物ほど、生きているものほど、次元を超えるためには多くの力が必要になる、ということではないだろうか。

術者がそのことを理解していながら、まるで実験のようにな度もくり返しているとすれば。

「最後は、人かな」

そう呟いた、まさにその瞬間だった。

それまでちらりとも感じられなかった魔力の塊が、すぐ近くに落ちた。

「……っ」

全身にのしかかる圧力。頭が割れそうなほどの衝撃。一瞬、息どころか心拍が止まった気がした。

ふわりと、目の前に広がったのは、常緑。

「みどり……」

聞いたこともないような、タクサスの叫び声。
力が抜けたように椅子からすべり落ちそうになった少女を、彼は支える。

ちりっ。エリオの肌をなぜる熱風。

「タクサス」

発信源の名を、エリオは静かに呼ぶ。

腕の中の少女から視線を上げた彼の顔は、真っ青だ。

ここまで狼狽している青年を、エリオは今まで一度も見たことがなかった。

己の力を、律しきれていない彼を。

身に宿る力が強ければ強いほど、危うい。

強大な力を制御するために、より強い心を持たなければならないから。

律しきれずに力に飲まれれば、待っているのは破壊と破滅のみ。

「……大丈夫だ」

青白い顔色のまま、かすれた声で、それでもタクサスはそう答えた。

かすかに感じた熱は、すでに消えさっている。

彼が大丈夫だと言うなら本当に大丈夫なはずだ。エリオはタクサスの判断力を信じている。

不測の事態ほど、冷静に、私情をはさまず対処する必要があった。

「落ち人だ」

タクサスは断言した。エリオも魔力の濃度から予想はしていたから、驚きはない。

この森を守るタクサスには、エリオよりも強く確かに感じられるものがあるんだろう。

今までと同じ魔力によって落ちてきた人。

自分の力で落ちてきたのか、別の者の手で落とされたのか。

己の目で確認しないことには何もわからない。

危険がないとは言いきれないけれど、ここはこちらから行くしかないか。

「オレが連れてくる。あとはよろしく」

「わかった」

言葉少なに役割分担を告げれば、タクサスも一言で応じる。

いまだに顔色は悪いものの、だいぶ落ち着きを取り戻したようだ。これならこちらは任せても平気だろう。

エリオはその部屋から直接、森へと転移した。

十二話 回想 - 木もれ陽のようなペリドット -

森に落ちていたものは、精巧に作られた人形だった。

……そう思いたくなるほど、それは“生”を感じさせなかった。

エリオは不快感を隠すことなく顔をしかめた。
誰も見ていないなら表情を作る必要はない。

いや、まさに目の前にいる存在はこちらに顔を向けていたけれど、そのガラス玉のような瞳には、何も映ってはいないだろう。

より強く力を感じる場所へと飛んでみれば、ちょうど目に見える範囲にあつた魔力の塊。

淡い金色の魔力は、森の緑に溶けこむことなく存在を主張していた。

宙に浮かぶ人形のような少女をおおい隠すように、強く、濃く、けれど不安定に揺れる色。

エリオは魔力を色として認識する。視なくても気配はなんとなくわかるけれど、一番はつきりと感じるのは色だった。

これは人にとって違い、一般的には視覚的情報のことが多い。たまに匂いや音として捉える者もいる。

色を視ればその魔力の本質はだいたいわかる。

誰の魔力なのか。術が発動する前なら、どんな効果を起こすための魔力なのか。

これまでの落ち物のまよっていた魔力と同じ色。同じ気配。けれど、何かがおかしい。

タクサスに聞いた話では、三つと一羽の落ち物は、ただ森に落ちてきたただだったという。

一応は見張っていたものの、そのあとは特に変わった様子はなかったと。

それもあって、エリオは実験のようだと思ったのだ。

今、目の前をただよう魔力は、明らかに術を発動させようとしている。

不安定に揺れ、不規則に濃淡を変えながら、それでもあらかじめ決められていたように動く。

おそらく、これがあちらの目的だ。

世界が異なれば術式も異なるらしく、エリオでも術の効果はうかがえない。

落ちてくる前に組みこまれていたようだけれど、それにしても力が乱れまくっている。きっと発動自体失敗するか、成功しても正しく作用はしないだろう。

エリオは慎重に歩み寄り、五歩ほどの距離を残して立ち止まる。

さて、自分はどう動くべきか。

失敗するまで待ち、それから落ち人を回収するか。今すぐエリオの魔力で術を強制的に止めるか。

どちらも利点があり、どちらも難点がある。

術を発動させれば相手の目的がはっきりする。けれど万が一術が成功した場合、被害は予測がつかない。その上、効果が出るまでに

時間がかかる可能性もある。

術を強制終了させればこれ以上被害は出ない。けれど相手の目的はわからない。今回のことで対策を練られ、再び同じことをくり返されてはたまらない。

そもその問題は、まるで人形のように意思を感じさせない少女。金色の魔力が、彼女のものではないことだ。

彼女の魔力は瞳の色に似た鮮やかな黄緑。それは金色の魔力に抑えられ、絡み取られ、術を構成するために使われていた。

「……嫌になるな」

ペリドットのような瞳を見上げ、エリオは低い声でつぶやく。

澄んだ綺麗な色に意思の光は宿っておらず、どこか作り物じみている。

不自然で、不気味で、何より不愉快に思えた。

人にしか見えないのに、道具のように扱われる少女。

彼女も協力者の一人なのかもしれない。だとしても、自分自身をないがしろにするなら同じこと。

幼さを残す容姿。身に秘めた魔力。何も知らずに利用されたと考えるほうが自然。

エリオは《賢者》だ。脅威にもなり得るこの身の力をすべて、人のために使おうと心を決めている。

人の命を、意思を踏みにじる者は許せないし、許してはいけなと思う。

生ぬるい風が森に波紋を呼び、鮮やかな黄緑色の粒子が金の魔力によって周囲にばらまかれる。

術が最終段階まで進んでいるようだ。

ここまで来ても魔力は安定することではなく、成功する確率はほぼないように見えた。

術式はやっぱりわからないけれど、魔力を結界で囲めば被害は最小限に抑えられるだろう。

ただ、その場合……この少女はどうなるのか。

深く考えることなく、エリオは五歩分の距離をつめる。

魔力に触れて干渉してしまわないようにと。また、攻撃を受けても術が発動しても、他に何が起ころうとも確実に防げるようにと空けていた距離。

「生きてる、よね？」

声に出したのは、返事が欲しかったからかもしれない。

予想通りというか当然というか、返事どころかなんの反応もない。この距離まで近づけば鼓動を刻む胸を見て取れたし、元々大気の流れで呼吸は確認できていたから、答えてもらう必要はなかった。

それでも、見たかったのは、意思の光。

うつろというには純度の高い、ペリドットの瞳に宿る感情。

映らないなら、映るようにすればいい。

エリオの中で優先順位が入れ替わる。

手がかりである落ち人の保護ではなく、少女の無傷での保護が最優先。同じなよううでいてだいぶ違った。

迷っている暇はない。何もしなければ術は発動してしまう。

このままにしておいてはいけない。とエリオの勘が告げるなら、それに従うまで。

まずは少女をおおう魔力を、エリオの魔力でもってすべて消し去る。

術に成る前の魔力は、純粋な力そのもの。異なる力二つをぶつけ合えば、より強いほうしか残らない。

それと同時に進行で、操られていた少女の魔力の主導権を奪い、エリオの力で抑えこむ。

……使い方は違っていても、やっていることは淡い金の魔力と同じ。あまり気持ちのいいものではないけれど、少女が自分で制御しようとしなのだから仕方がない。

普通は意識がなくてもここまで丸投げ状態にはならないはずなんだけれども。

腑に落ちない思いを抱きつつ、浮力を失った少女を受け止める。

ひらり、と帯が舞い、蝶のように見えた。

草の上に座らせ、体に異常がないことを確認する。数分もすれば意識も戻りそうだ。

懷から飾り気のない紐を取り出して、自分の魔力を込めてから、少女の髪の一部を後ろで軽く編んで結ぶ。

こうすることでエリオとのつながりを作り、彼女への干渉を可能にさせる。さらに簡易的な結界の役割も兼ねてくれるだろう。

手際よく一連の作業を終え、安堵と罪悪感からため息をもらす。

魔力とは人の命に宿る力。それを他人が干渉して制御するということは、手足に糸を絡ませたようなもの。その気があれば先ほどのような操り人形にもできてしまう。

もちろん仮にも《賢者》であるエリオにそんな暴挙は許されないし、するつもりもないが。

できる状況にあるという事実には、感情論は関係ない。

「……タクサスに叱られるかも」

型破りな《賢者》が多い中、生真面目で良心的な彼ならありえる。事情を話すにしても、ほとんど直感で行動してしまったから、実のところどれほどの危険性があったのかは説明しようがない。

エリオのこういった性格も考慮して、小言の一つ二つで済ませてくれると思いたい。

タクサスだったらどう対処したのかな。と、意味のないもしもを考えてしまう。

自分のほうが年長で、《賢者》歴も長い。経験も判断力も劣ってはいないという自負はある。

けれどこの森は彼の領域で、本来ならここにいるべきなのは彼だった。みどりのことさえなければ。

今ごろ彼女を介抱し、倒れた理由を探っていることだろう。

協力を求められたものの、タクサスの領域で、エリオが手助けできることは多くはなかった。

ふと、手で支えていた少女の肩の重みが、軽くなる。

ガラス玉のように無機質だった瞳に、人らしい光が灯りだす。

状況がまったくわかっていないようで、ぼんやりとはしているけれど、確かに感じられる意思。

木もれ陽のような、あたたかみのあるペリドット。

きれいだ、とエリオは素直に思う。

心があつてこそその生命。

清濁も矛盾も含んだ感情こそが人を彩り、人として生かす。

たとえ世界一の職人が作った人形だったとしても、その鮮やかな

色に、生に、敵いはしないだろう。

エリオは自然と笑みを浮かべていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3286x/>

ひらり、蝶のような

2011年12月30日22時46分発行